

お茶の水女子大学の行方

途上国の女性たちとともに学ぶ場として

本田 和子 学長

アフガニスタンの女子教育支援が本格化する。奈良女子大・津田塾大・東京女子大・日本女子大の五つがコンソーシアムを形成し、協力し合いつつアフガニスタンの女性教員を日本に招いて研修の機会を提供しようとする試みであるが、このことについては、先般、簡単にお知らせしたことがある。



本田和子学長

私たちは、いま、途上国の女子教育支援は、日本の女子大学、特に国立女子大学が担うべき重要な責務と考えている。

明治近代化以降、速やかな教育立国を志したわが国は、欧米先進国の援助と協力を得て、短期間で教育水準を高度化することに成功した。女子教育も例外ではなく、取り分け、第二次大戦後の教育改革期には、アメリカ教育使節団による強力な支援を得て、今日のような女子大学の誕生を見たことを忘れてはならない。現在の私たちの大学が、内外の有識者たちの女子教育に注がれる熱意の結晶であること、取り分け、国民の税金によってそれが実現されたことを思うなら、これまでに受けた様々な恩恵に報いる術を考えるべきであろう。本学が、今後、女子教育の黎明期にある途上国のため

に些かの力を提供することは、これらの恩恵に答えるためにも極めて重要な活動と言える。

さて、この企ての一つが愈々実現の機を迎えて、二月初旬から二〇名の女性たちが来日されることになった。ダリ語を話す人が多いとかいう研修団とどのように対応し、どのように研修の実を上げたらよいかと、五女子大学の関係者たちは、いま、知恵を絞りがあつて、ここで産み出された名案の一つが、学生たちの異文化インターンを兼ねた支援活動の組織化である。来日グループに学生が二人ずつペアで付き添い、一日の行動に目配りしつつ必要な援助の手を延べるといふ試み。勿論、ダリ語の通訳は付くのだが、何しろ地下鉄に乗ったこともないという一行に付き添って、細々としたその必要に応えるのは、たった一人の通訳の手に余る仕事に相違ない。そこを補うのが学生達の勤め。参加する学生にとつては、言葉の通じない人たちと行動を共にするために、どのようにコミュニケーションを図ったらよいかを模索することの上もない機会となった。

国際化とは単に欧米の大学と交流したり、外国語が上達して外国事情に詳しくなることだけでなく、どんな地域のどんな文化を持つた人々とも、共に生きる仲間として手を取り合う努力をすること、そして、一人一人、自分に何が出来るかを模索し、可能な試みを通して共生の実を上げることにも他なるまい。研修団の来日を捉えて、こんな格好の教育実践が展開されることを心から嬉しく、感謝している。途上国支援は、単に国際貢献のための大学の事業であるだけでなく、ここで学ぶ学生たちが真の国際人として成長するための貴重な教育機会と思うからである。

大学院博士課程での日仏学術交流が始まる

室伏きみ子 理学部長



日仏共同博士課程調印式
調印者は日本側コンソーシアム代表の東京農工大学 宮田学長(右)と、副代表の明治大学山田学長(左) 後ろ中央がクロード・エニユエル女史

お茶の水女子大学を含む、日本、フランスの約六〇大が、共同で博士課程を設置することに合

意し、平成十四年九月十三日に、パリ市内の大学学長会議(CPU)において、日仏共同博士課程(コレージュ・ドクトラル・フランコ・ジャポネ)協定締結の調印式が行われました。本学からは、本田学長の代理として、私がこの調印式に出席しました。

これは、日仏の博士課程大学院生の交流を通じた学術交流を促進することを目的に、それぞれの国でコンソーシアムを創設し、両コンソーシアム間での協定締結が行われたものです。

このプロジェクトには、日本側からは、本学、東京農工大、東工大、一橋大、都立大、